

# 小田山城について

小野 英 治

(会員 弥生町井崎)

弥生町では平成五年度より七年度にかけて国庫補助事業による小田山城と関連遺跡の調査を実施している。

平成五年度は小田の台地（熊野神社前）を主として試掘調査を実施した。調査にあたられたのは県文化課の高橋信武氏であった。

ここからは縄文・弥生・古墳・中世・近世期の遺物が出土して、弥生町という町名が弥生時代と関係づけられたことは嬉しいことであった。

弥生町内では、古墳時代の横穴古墳群（上小倉雨龍山腹）はあるが、それ以前の遺跡が未確認であったから、縄文時代にまで及ぶ複合遺跡が小田台地にあったことは大きな収穫となった。

この中で、中世遺構の、空堀（薬研堀）が確認され、ここからは石臼片が出土して、館址と推測されるが、一部の試掘であり規模、構造等の詳細は不明である。しか

し、今後の調査によっては佐伯氏に関連する居館の可能性もあり興味ある台地である。

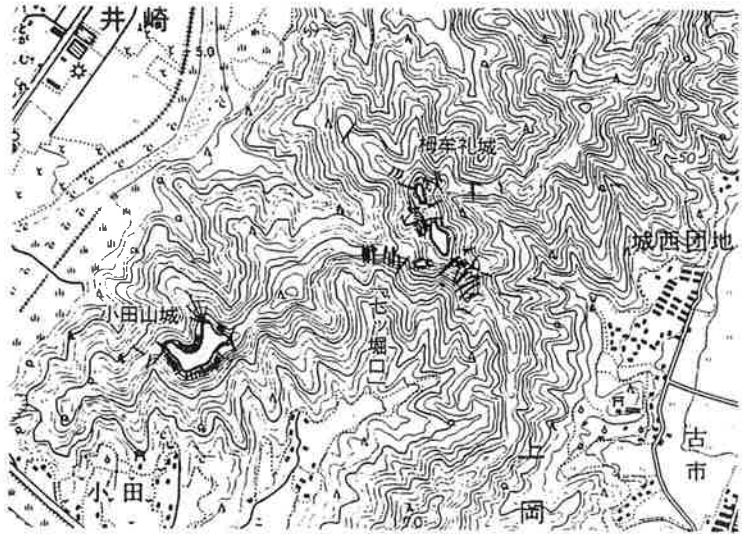
なお、このあたりは通称「出堀組」と称され、現状は畑地であるが、中世戦国時代は堀をめぐらした城館が想像されるものの、残念ながらそれらしい伝承はない。

平成六年度は、この小田台地北方に続く山城、小田山城（仮称）を中心に調査を実施した。ここは雑草木が繁茂し、特にシダの密生するところから伐開作業が主体となった。

これには、先年と同様、弥生町歴史文会、同文化財愛護婦人団、地元有志に体験学習を兼ねて作業に従事していただいたが、今回は特に高校生のアルバイト参加があった。

小田山城の調査は県文化課の高島豊氏が担当され、縄張り図の作成、一部の試掘調査を実施した。

小田山城（標高一七七メートル）については、既に、一九八〇年「梅牟礼城の規模と構造」と題して『佐伯史談』一二二号で発表したところであるが、これに掲載した図は詳細な実測図ではなく、また、村田修三氏が『中世城郭事典』で一九八七年調査の「梅牟礼城付小田山出



小田山城と柵牟礼城の位置関係

城」の図も同様であった。これは先述のように密林状態で踏査が困難を極めたためである。

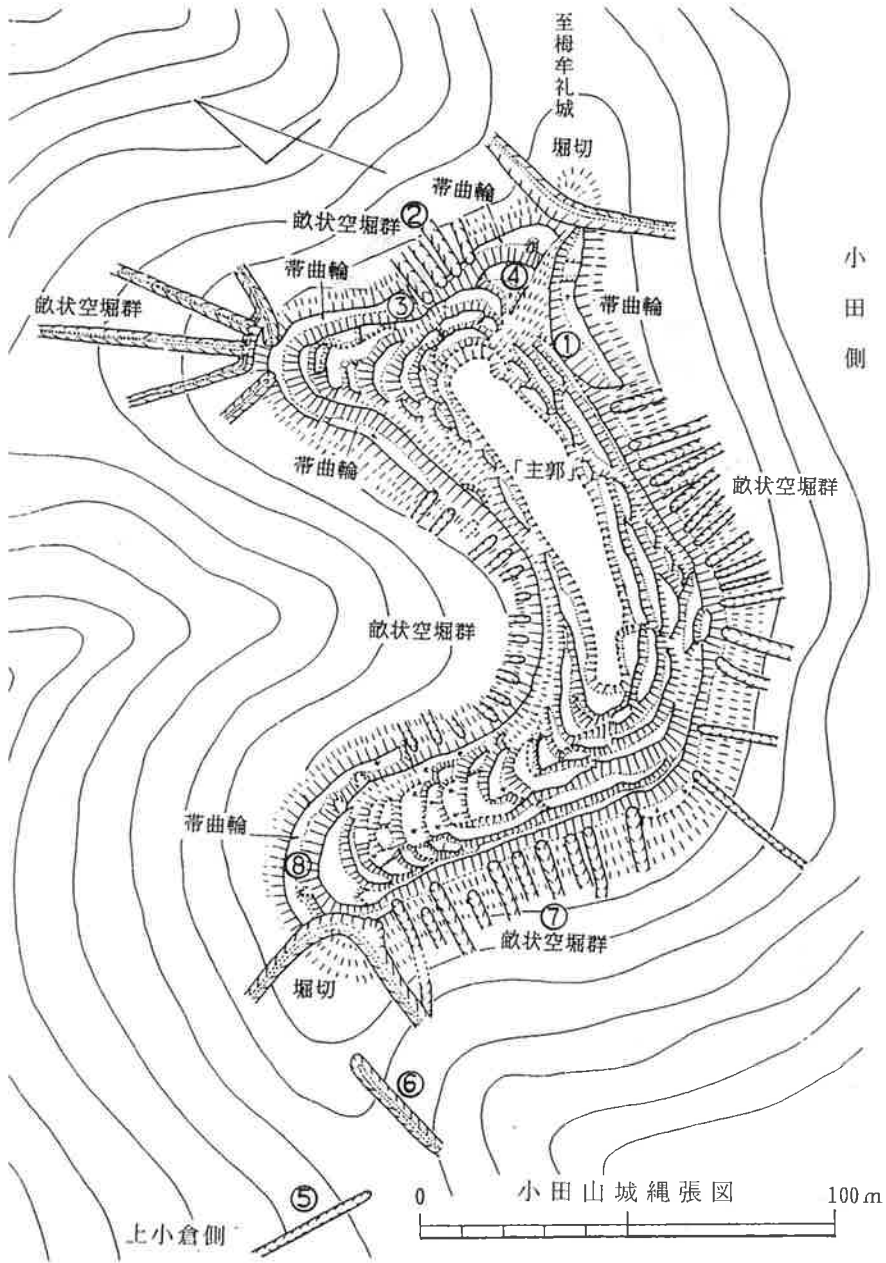
柵牟礼城（標高二三・七メートル）と小田山城とは直線距離で両者の最先端堀切間は約四六〇メートル、この間に標高一八一メートルのこんもりとした山がある。

この三山を眺められる場所としては、弥生町大字門田、井崎、上小倉、大坂本、佐伯市内では蛇崎、津志河内方面がある。つまり、柵牟礼本城に比して小田山城は見える位置が限定されているのである。

柵牟礼城と小田山城は、その構造において大きく異なったものとなっていて、両者は別の城であり、同時代、同領主に縄張り築城されたものとは考えられないようである。

その理由の第一は、柵牟礼本城が尾根筋に多数の堀切を連続して防禦し、豎堀は一部しか見られないのに比して、小田山城は、堀切は両端に各一筋のみで、しかも尾根の最低部でなく、やや登った所に設けられていて、周囲は豎堀が五十余と多数設けられている。

その二は、柵牟礼城の曲輪が完全な平坦地として削平されているのに比して、小田山城は不完全な削平による



小田山城縄張図

小田側

上小倉側

小曲輪が多数設けられていることである。

これは、佐伯氏の縄張り対大友氏の縄張りで見られるが、そこで問題となるのが、この小田山城の創築である。

多数の研究者は小田山城を天正年間の対島津戦に築いたものとする。私も島津戦に活用したことに異論はないが、はたして創築はどうであろうか。

梅牟礼合戦の大永七年（一五二七）大友義鑑の命により臼杵長景は佐伯惟治の籠もる梅牟礼城を攻めたが、これを『梅牟礼実録』には次のように記している。

「所は野田、小倉山、小田ヶ峯、西より北のすみまでは床木山、宮の河内陣所を必死と打継ぎ云々」とある。小田ヶ峯が小田山城ではなかったかと考えられないだろうか、つまり、梅牟礼城を攻めるために臨時に築いた付城である。梅牟礼城を攻めるには尾根続きのこの方面が最も適当な位置なのである。

同書はさらに「或る時寄手の兵七ツ堀口に打出せし處城内より深田一党の者共云々」とあるのは、この尾根続きにある堀切、堅堀が七ツ連続するところと推察される。

当時の一等史料である「大友義鑑感状」（切紙）には次のようにある。

佐伯惟治成敗の刻、彼の城攻口に於て疵せられ忠節感悦に候。必追而一段と賀し申す可く候、恐々謹言

十一月十三日（大永七年）義鑑 花押

久保中務丞殿

（大分県史料、久保文書、大分市蔵）

これは、小田山城より攻め、七ツ堀口（攻口）での合戦を物語るものであらうと考えられるのである。

なお、梅牟礼城はこの七ツ堀の最先端の堀切の小田側は巾員十二メートルにも及ぶ巨大な一つの堅堀となるが、井崎側は二つに分岐し、岩崖となって谷に下り、さらに対岸に向かい立ち上がる段差がみられ、字図によると、この線より下方を鬼田、上方は城山となる。これは水源を確保するため谷を包んで、これより城内としているものと考えられる。

なお、谷から上方に向かい右手七ツ堀に向かつては立ち上がり土塁段差となるが、左手は谷の大岩から、上方の大岩に向かい崩れかかつてはいるが、立ち上がり石垣が一部に見られるのは注目されることである。

次に、小田山城の縄張り注目されるのは、梅牟礼城側より攻めた場合を考えると、堀切を突破して左手帯曲

輪に入れば右手は切岸(急斜面)①で登れず、前方は

堅堀群で通行できなくなる。右手に進めば同じく四つの堅堀②となり、さらに地山を土塁とした曲輪③から攻撃を受け、左手は切岸となる。

直進して坂道を登れば、階段状の小曲輪④が連続して防禦して容易に突破できない。

これと反対方向から攻めた場合であるが、注目されるのは、堀切の外側尾根の最低部に上小倉側に向かって下る百メートル余の堅堀⑤、その内側やや登ったところに小田方面に下る中広い堅堀⑥がある。そして堀切に至るが、これを突破して右手に進めば左手は切岸と前方は連



切岸(右側崖)の下をめぐる帯曲輪



畝状空堀群 手前は切岸

続する堅堀群⑦となる。左手に進めば帯曲輪⑧となり、右は切岸、やがて堅堀で行き止まりとなる。実に戦うための城づくり、工夫されたり、工夫されたり、縄張り、特に直進する坂道は多数の階段状小曲輪がみられ容

易に山頂の主郭に至ることができない。この小田山城は、堅堀の多いことが最大の特徴であるが、それは大規模なもの、小規模なものなどその地形に応じ多種多様である。

この堅堀で注目されるのは北方にある畝状空堀群で四つが連続したものとなっているが、この方面は割と緩傾斜で尾根筋でもあるから堀切の変形とみられないことも

ない。

小田山城では三ヶ所ほど試掘をしたが、山頂部二ヶ所から中国産の磁器、景德鎮窯産と福建省漳州窯産と在地産の土師質土器片が出土しているが、高畠氏によれば、景德鎮は大永年間に使ったとしてもよいが、漳州窯は天正以降しかみられないものであると考察された。

私見であるが、大永七年時は簡単な陣城で今日見られるような遺構は天正期に大友援軍により設けられたものではないかと考えている。建物は柱穴があるところから掘立柱の簡単なものであったことは容易に想像される。

最近、佐伯図書館から「元禄十年上野村之図」が発見されたが、これには梅牟礼城を「つがむれ」と記し、小田山城を「新城」と記している。江戸時代中期には新城と称していたようであるが、これは梅牟礼城より後に築かれたことを意味している。また「つが」と「トガ」は同じ樹木であるからこのように俗称されたものである。

梅牟礼城と小田山城（新城）は想像復元図が、学研刊『戦国の城（西国編）西ヶ谷恭弘著』に描かれているので一般にはこれを見るのは楽しいが、これはあくまで想

像図であり、当時の正確な姿は不明である。

なお、この一帯は数年後史跡公園として整備される計画があり、林業構造改善事業による林道開設も進んでいるので、容易に見学できることとなる。



元禄十年上野村之図部分  
（中央部に新城・矢印）